新潮文庫

石狩川

本庄陸男著

新潮社

石川狩

定價180圓

新潮文庫 草108

昭和三十年七月三十日 發行
昭和四十四年九月十日 十九刷

著者 本庄陸男

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社 新潮社
郵便番號 一六二
東京都新宿區矢來町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷・石福印刷株式會社 製本・憲專堂製本所
© Tamako Honjô 1955 Printed in Japan

新潮文庫

石狩川

本庄陸男著

新潮社版

865

石狩川

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

一

もはや日暮れであつた。闊葉樹のすき間にちらついてゐた空は藍青に變り、重なつた葉裏にも黑いかげが漂つてゐた。進んで行く溪谷にはいち早く宵闇がおとづれてゐる。足もとの水は蹴立てられて白く泡立つた。が、たちまち暗い流れとなつて背後に遠ざかつた。深い山氣の靜寂がひえびえと身肌に迫つた。

ずゐぶんと歩いたのである。道もない險岨な山を搔きわけて登り、水の音を聞いてこの谷に降りて來た。藪と木の根を傳ひ、岩をとび越えまた水の中を押し渡り、砂礫を踏みつけた。午食を使つて間もなく、踏みぬいた草鞋を履きかへた。次第に挾ばまり細くなる流れを逆にさかのぼつてゐた。この尾根を越えてしまへば目ざしてゐる土地に出ることが出來るであらう。出來るはずだ――と云ふのであつた。まだか、まだ來ぬのか――と彼らの心はどこか隅の方で叫んでゐた。口には出さなかつたが、脛から腰にかけての、この硬ばる疲勞はどうすることも出來ないのである。

たのみにするのは四五間先を歩いてゐる案内人であつた。早急に思ひ立つた踏査に、取りあへず、大急ぎで雇ひ入れた附近の土民であつた。

――それほど狼狽してゐたのだ。辛うじて許可を得たその土地では開墾の見込みが立たなかつた。前の年の經驗が痛々しいのだ。携へて來た種子は何ひとつ實らなかつた。風土の變化ばかりではない。赭い土はざら〳〵手から洩れ、冷たい風が終日海から吹きあげ、針葉樹も滿足に育たないやうな荒れ地であつたから。彼らの顏に浮ぶ不安と動搖は見のがせない。やうやく納得してやつて來た最初の年のことなのだ。祖先の地を追ひ立てられて、かういふ方策を取らなければならなかつた彼らは、ともぐ〳〵に哀しい境涯であつた。それ故に、一切の將來を政府の誠意に任せて信じてゐたのだが、これは餘りに慘酷な酬いであつた。

これでは仕方がない。

しかし、かうして吳れと云ふ要求も出せない破目になつてゐた。それもまた、みんな承知してゐる。いはば敗れたものにあたへられた窮命である。にも拘らず、だからどうにかしなければならぬと云ふ悶えも胸を去らなかつた。はじめて知る長い冱寒の雪に埋れてそれを考へ、それを相談した。いまだに贖はれないほどの罪科を犯した自分らであつたらうか。――內心の不平は、思ひあまつた人々の眼を血走らせるのであつた。

それを宥めて、もとの家中の重役にゐた阿賀妻は、とにかく、春のくるのを待つてゐた。日本海の水が綠を帶びて、日毎に南の風があたたかくなつて來た。うつ積してゐた人々の氣持にも季節のめぐみは一脈のやはらぎを傳へるのであつた。政府の方針が開拓に向けられてるのであるならば、まだ殆んど手をつけてゐない闊いこのえぞ地に、彼らの棲む恰好の土地が無いはずはなかつた。えぞ地を措いて、生きる餘地はすべて塞がれた、と、さう、思ひつめた彼らだ。

新たな土地を探さなければならない場合であつた。

あたかも開拓使長官の一行が巡視して來た。ありのまゝ見て貰へばよかつたのだ。どんな素人にも判然としてゐるわるい土地であつた。眉をひそめた彼らは、速かに肥沃な土地を選定して、至急貸付けを願ひ出ろと諭した。

――ありがたき仕合せ、と、それを受けた。

愁眉をひらいたのである。思はず頭を低げてしまつた。

その樣子をじろ〳〵と眺めてゐたのが玉目三郎であつた。

馬に乘つて遠ざかる彼ら支配者を海岸路に消えるまで見送つた。そして、阿賀妻らがほつと顏をあげたとき、彼の目に映つたのは、ひとり傲然と唇をゆがめてゐるその男であつた。彼の肩先がどういふ考へを現はしてゐるか、聞いてみるまでもなかつた。この集團移住を率先してひきゐてゐる彼らの主君がそこにゐなければ、口を極めて罵つたかも知れない。――云ふまでもなかつた。憐愍をあたへるやうな態度で土地選定を慫慂した馬上の男は、ともに天をいたゞかずとした薩派系の人物であつたことだ。しかしそれも、時と所が變つてゐた。前途をきり拓かうと腐心してゐる阿賀妻らの態度と、それを不甲斐なく見るもののあるのも是非ないことであらう。

はげしい時代の動きは、家中の地位によつて概ね二派の意見を釀すのであつた。陰に陽にあらそひながら、行くべきところに行き着きかけてゐた。さういふところへひよつこり現はれた一つの躓きが、沈んでゐた反目をまたしても搔き立てるのである。玉目三郎の不滿げな態度がそれを代表してゐた。お互ひの心をすみ〳〵まで知つてゐるのは舊主であつた。家中のものは彼の顏色

を注視した。――裁斷を待つのである。

古く泥んだ仕來りによつて、「殿（との）――」と仰がれてゐたその人の胸のうちほど複雜なものはあるまい。痩せた土地を投げつけるやうに與へられ、ぢつと我慢してゐた彼らの氣持の大根（おほね）には、かういふ舊主の心遣ひが貫ぬいてゐたのである。沮喪した家中のものと共に、生きもしよう死にもしようと、兩肌を脱いだ彼の決意を蔑しろにすることは出來なかつた。

彼もまた、「ありがたい仕合せ」と挨拶をした。

屈服であつたが、それもまた止むを得なかつた。

それでは――と、移住計畫の主事に任ぜられてゐた阿賀妻の胸にひらめいたのは、トウベツといふ土地であつた。既に松浦武四郎踏査による地圖によつて先頃からひそかに調べておいたものであつた。廣袤百里、樹木鬱蒼たりと聞き傳へた平原であつた。そこを灌漑する川は沼から來る川の意味によつて、トウベツ河と名づけられてゐた。間もなく合するのは大いなるイシカリ川。流れ下つた河口の海港に達するまで、この間はおよそ六里半か。河舟による交通や運送も不可能ではあるまい。

せまい開墾小屋の外まで居ならんだこの家中は總勢四十六人である。髷を切つたものも相當あつたが、脇差だけは離し兼ねてゐた。かういふ悲慘な姿で、かういふ目的のために寄り集まらうなどと五年前の彼らは夢に見たこともなかつた。小屋々々の軒や戸口では、女子供らがしのび泣くのだ。

それは明治四年の舊五月四日であつた。

梅雨の來ぬ間にといふ心づかひもあつた。

阿賀妻に一切をゆだね、先づ踏査を試みることになつた。指名を命じられた彼は、應急の處方も心得てゐる戸田老人、先ごろも行を共にした大野順平、それから玉日三郎どのにお願ひ申すと云つた。案内人一人荷物を運ぶ人夫二人。

五月五日の早朝、方向を南東にとつて出發した。繪圖面の上での目測はざつと十里。山越えをして行つたとしても二日の行程で足りよう。

歩けど〳〵一向にそれらしい平地は見あたらなかつた。その日は一日歩きつめた。次の日も一日いつぱい歩いた。さうして三日目になつてゐたのである。

ほの暗くなつた谷峽は、またゝく間に闇に埋められた。砂の上に立つた阿賀妻は、前に行く案内人を呼び止めた。

「おい、ちよつと待て、」

次第にこの案内人に信用が出來なくなつたのだ。第一に彼が頼みにしてゐたのは磁石であつた。圖面はこの案内人も云ふ通り、奥にはいれば想像で描かれてゐる不完全なものであつた。あとは自分の直感に頼るだけである。

「どういふことになつてゐるんだ？」とつゞけて云つた。

「それを、あツしも今考へてゐるところだ、」

「なに？」

後のものは、そこの溪流をこちら岸に横切つてゐた。彼らの脛で掻きまはされた水がじやぶじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

やぶ音立てて案内人の言葉を消してしまつた。

「待て！」と阿賀妻は珍しく險しい聲で云つた。

相手はそれを豫期してゐた風であつた。いくらか猫背になつた道案内は、五六間離れたむかうの岩に立つて首をすくめてゐた。倒れ込んだ巨木の幹が間を隔ててゐた。うす闇の中に身をちゞめた彼は小さくなつて次の言葉を待つた。

「戻つて來い、」

思つた通り、今度は取りひしぐやうな強い聲であつた。ごつんと膝頭をぶつつけた彼は、あたりに木魂した聲を遠く聞いて、ふるへ聲で答へた。

「戻るには戻りますが、」

「どうなさいました、」と、中年の大野が笠の緒をゆるめながら訊ねた。

「方角がちがふやうだが、」

「さうですか、」

「ちがひましたかな、」と、戸田老人はふところを探つた。圖面を取りだしたのである。

「どこを案内しよつたのでござりませう、あいつめは、」

さう云つて、きつと眼をあげたのは玉日三郎であつた。二言目には脇差に手がかゝつた。

「斬るぞ、」

「まあ、まあ、」

岩の上に立ちすくんでゐた頬かむりの男は、枯れ枝の先をつかんでおそる〳〵向き直つた。疲

れた人夫らは濕つた砂にべつたりと腰をおろして背負縄をづらした。煙管を銜へ、かちりと打つた石の火がぽツと赤らんだ。

四人のものは額を集めてゐた。阿賀妻の掌にある磁石の蟲に見入るのだ。汗ばんだ硝子の底でぴく〳〵動いてゐる磁針に目をおしつけて行つた。

おもむろに老眼鏡を取り出して戸田老人が云つた。

「なるほど、これでは逆の方角になるやうぢやな、」

「道にまよはしよつたな、貴様は——」

そばに來てゐた案内人は玉目の聲に一足とび退つた。

「それでもう、さい前からいろ〳〵くふうして歩きましたが、」

「くふうとは何ぢや？」と阿賀妻が云つた。

「へえ、つまり、その」

「貴様——いつ、その地に參つた、」

「一昨——その前の年でしたかな、あれは何でも、兵部省とかの仕事で、」

「季節はいつか、夏か冬か？」

「それが冬で——」

「冬ウ？——」と阿賀妻はうなつた、「しからば雪のあるときぢやな、」

「つまりさう云ふわけで、」

「この方面に相違ないか、」

「――と、さう思つてご案内いたしましたが、かう山の中にはいり込んで、かう草木がしげつてゐたんでは、皆目見當もつきませんで、」
「ばかッ！」
「へえ、」
「しかし、われらにも落度はあるといふもの――」と、阿賀妻は仲間のものに向きなほつた、「ここらで夜を過して、明日はまた明日の日を待たずばなりますまい、」
「どう致しませう、」
崖の下にその男を追ひつめてゐた玉目三郎は、阿賀妻をふりかへつてさう云つた。星明りに彼の瞳が白く光つた。指示を受けるやうに、彼がどうしませうとたづねることは、この曖昧な男の成敗を意味してゐた。一圖に彼は思ふのだ――大切な彼らの一兩日を踏みにぢつてしまつた、と。それはまた彼の若い心に消えてゐない硬論のなごりでもあつた。思ひは他の三人の胸にも通じてゐた。それを喰ひとめて、た易くは爆發させ得ない年齢の垣が出來てゐたに過ぎない。むしろ、同じ思ひを胸にひそめて、ふきあげる激しい意味をこのやうな未開の地に捻ぢ向けたのである。主家の安泰といふことが第一であつた。
その理窟が判らぬ玉目三郎でもなかつた。主家の安全のなかには、おのれ自身の安全も含まれてゐたからである。おのれと主君とは一つの圍ひの中に棲んでゐた。殊にそれが、先祖の位牌を讓り受けた戸主にとつては退引ならぬきづなであつた。
「放つときなされ、」と戸田老人が低く云つた。大野順平も笑つて云つた。

「むしろ刀の錆でござらう、われらの斬らなければならぬものはこんなものではありませなんだ、」

「人夫ども！」と阿賀妻は、さういふいざこざから話を避けて、煙草をふかしてゐる男たちに云つた、「何分とも空腹を覺える、先づ火を焚かずばなるまい、飯を炊いて貰ひたい、明日のために身體を養はずばなりますまい、」

「この場所で？」

「結構々々――！」と阿賀妻はあたりを見まはした。選り好みはなかつた。野宿の心を決めてゐた。

二

夜明けのうすあかりはいつまでもよどんでゐた。立てこめた深い霧が、時間とともに溪谷を滿すのであつた。ぞつとするほど肩の冷たさを感じて玉目三郎は眼をさました。乳色の靄に隔てられて、赤い焚火のあり場所がひどく遠いもののやうに見えた。すぐに起きだした。その周圍にゐる仲間の姿もぼやけてゐた。せゝらぐ水音の中で、話してゐる彼らの低い聲もよく聞き取れなかつた。

それがあたりを埋めた霧のためであると氣づいたとき、彼はすつくと立ちあがつた。不覺を取つた恥かしさを覺えた。ごめん――と口の中で云つて彼は流れのそばに蹲んだ。その小さな川の水を掬つて口を漱ぎ、顏を洗つた。深山の水は切れるやうな冷さであつた。洗はれた肌には爽昧の戀氣が浸みとほつた。

「お目ざめか、」

戸田老人が靄の中でふりかへつてさう云つた。彼の一言は何かの合圖のやうであつた。それまで焚火を圍んでゐた人夫たちが急にごそ〳〵と動きだした。今は人夫に顚落した昨日の案内人は、彼の傍を通るとき、うや〳〵しく頭を低げてゐた。

彼らは彼の眼覺めることを待つてゐたのだ。

人夫の一人は朝の食事をひろげだした。他のものは荷ごしらへにかゝつた。木の枝に張り渡した莚をはづし、刈り草の上に敷いた筵を卷きはじめた。

朝の挨拶を受けた阿賀妻は、目もとに笑みをたゝへて彼のために席をあけた。

「そなたは苦勞もなげによう睡つてをられた、夢など見てはゐなさらなんだか？」

「汗顏の至りで、」

「猛獸にも襲はれず、まことにゆつたりとして一夜を過しました、久しぶりの熟睡でした、さて本日の行程ぢやが、この霧では、」

彼はきり立つた岸べの木々を見あげた。それさへ半分は隱れてゐた。

「山越えは更に迷ふばかりでござらう、今もその相談を致して居りましたが、そこで、かういふ風に――」

夜つぴて燃しつゞけてゐた焚火の上に、彼は更に一握りの枯れ枝を投げ入れた。火の粉が舞ひあがつた。膝をたててゐた仲間の顏がぎらりと輝いた。

「大野どのも賛成なされたので――」と阿賀妻が云ひつゞけた。彼らはこんな困難な旅の經驗者

なのだ。だからそれは命令であつた。けれどもまた相談でもあつた。昔のやうに强制することは出來ないのである。各々のものは同じ立場で同等の權利で談合を進め、納得しなければならない。

「かういふことでござる――」と、阿賀妻は濕つぽい地圖をひろげて、指さしながら說明した、

「倖ひ貴殿はあのものを生かして置いて吳れたので、ひとたびこちらの原野――オヤフロの野と書きこまれてゐるこの地點に立ち戻り、目ざすトウベツの山を見定め、しかる上はすべてわれ等の才覺にて行き着き得べしと考へるが、いかゞでござらう？　豫定の三日はむなしく過した、よつて本日は最大の努力をいたしたい、ざつとこの間、七八里と見積ればよからうか、――あやつ、捨て置き難きものなれど、殘念ながらわれら一同、一向に土地不案內、トウベツはよき土地なりといふ風說のみにて、ありやうは地形もしかと存ぜぬわれら――ご承知下さるか？」

無論それに異論のあらう筈はない。

「しからば――」

阿賀妻は人夫をさし招いた。

椀にくんだ水で食後の口を洗つた戶田老人は、ごま鹽の長い眉毛をつきだして大野順平に話しかけた。

「見て下さらんか？　蟲が喰ひついとるやうで、」

「どこでござる、」

「この中で――」と、老人は枯れた指で自分の眉毛を示した。

「はゝあん？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com